

コロナ禍における乳幼児の成長発達への影響

岩本 美由紀*

明治国際医療大学看護学部看護学科

要 旨 本研究は、コロナ禍における乳幼児の日常生活の実態と成長発達への影響を明らかにし、感染対策を継続しながら乳幼児が安心して、健やかな成長発達をしていけるような支援を見出すことを目的とする。今回、保育を通じて乳幼児の日常生活を身近で支えていること、乳幼児の成長発達を客観的に評価できる事より、保育士を対象とした半構造化面接を行った。保育士のインタビュー調査より得られた結果は、修正版グランデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて分析を行った。結果、コロナ禍における乳幼児への影響として、【保育士のマスク着用による乳幼児への影響】【食環境の変化による乳幼児への影響】【長期化する自粛生活による乳幼児への影響】【感染予防対策による乳幼児への影響】【保育士の乳幼児に対する意識による影響】の5 カテゴリー、9 サブカテゴリー、23 概念が抽出された。乳幼児は周りの環境による影響を受けやすく、コロナ禍における保育士のマスク着用・食環境の変化・自粛生活・感染予防対策などによる成長発達への影響が示唆された。さらに、現在のみならず将来への影響を考え、保育士がコミュニケーションなどの関わりを工夫し、日々意識的な関わりを行っていることが明確になった。今後、感染予防対策を実施しながら、乳幼児の健やかな成長発達を促進する意識的な支援を見出すことが必要である。

Key words 乳幼児 Infant, 成長発達 Growth and Development, コロナ禍 Corona Crisis

1. はじめに

2019年に発生したCOVID-19(新型コロナウイルス感染症)は、パンデミックとなり通常の日常生活は一変した。日本各地においても、繰り返し出される緊急事態宣言に基づく急遽の対応は、人々の生活様式や社会的つながりに大きな影響をもたらした。現在も、COVID-19の収束時期は予測がつかない状況が継続し、社会全体が感染・発症に対する不安や恐怖など、心理的ストレスを抱えながらの生活を余儀なくされている。

このような状況下で、子どものメンタルヘルスの

問題が明らかになってきている。自粛による休園・休校、外遊びや友人との接触機会の減少、常時マスク着用、ソーシャルディスタンスといった日常生活の変化は、子どもの心理面へ大きな影響を及ぼしている。2020年の国立成育医療研究センターによる学童期以上の子どもを対象としたアンケート調査によると、コロナ禍の外出自粛の影響によりテレビやスマホ、ゲームなどのスクリーンタイムが1日4時間以上の子どものが31%、「イライラする」「集中できない」「なかなか寝付けない」といったストレス反応がみられた子どもは75%いたとの結果が得られている¹⁾。しかし乳幼児に関しては、コロナ禍の生活の変化による精神面や成長発達に関する研究はあまりみられない。乳幼児は、人との関わりを通じて言語など

*連絡先：〒629-0392 京都府南丹市日吉町
明治国際医療大学 看護学部
E-mail: m_iwamoto@meiji-u.ac.jp

のコミュニケーション能力を獲得していく段階にあるため、身近な人の「表情の変化」から「表情から示す意図」、「相手の気持ちを汲み取る力」を身につけていく発達段階にある。そのため、身近にいる人が常時マスクを着用していることで、「人の認識」を育む能力を獲得することが困難になり、対人コミュニケーションの発達にも影響を及ぼすと考える。また、ソーシャルディスタンスを保つための食事は、「食の楽しみ」や「食を通してのコミュニケーション」が保ち難しく、「食育」への影響も考えられる。

現在、各保育施設においては、子どもの成長・発達への影響を考えた柔軟な対応を行っている。WHOより「5歳以下の子どもへのマスクは必ずしも必要ない」との見解がだされ、特に2歳未満の乳幼児においては、マスク着用による呼吸困難や体調不良、熱中症、窒息などのリスクが高まる事が指摘されており、マスク着用は推奨されていない。しかしながら、保育施設内での感染予防対策は必要となるため、保育士のマスク着用や、食事時の緘黙などの生活制限は欠かせない現状にある。

そこで本研究では、コロナ禍における乳幼児の日常生活の実態と成長発達への影響を明らかにし、感染対策を継続しながら子ども達が、安心して健やかに成長発達していけるような支援を検討したいと考えた。

II. 方法

1. 研究目的

本研究は、コロナ禍における乳幼児の日常生活の実態と成長発達への影響を明らかにし、感染対策を継続しながら乳幼児が安心して、健やかな成長発達をしていけるような支援について検討することを目的とする。

2. 研究対象

本研究の対象者は、京都市内の2施設のこども園で勤務している保育士6名である。対象となる保育士は、乳幼児のCOVID-19流行下以前との変化を把握

するために、勤務経験が3年以上の保育士とした。

3. データ収集方法

2施設の認定こども園の施設長に対し、研究協力依頼書を基に口頭で依頼を行い、承諾が得られた後対象候補者の選定を行った。承諾を得られた対象者に対し、研究者より研究協力依頼書を用いて口頭で説明を行い、同意書にて研究協力への同意を得た。インタビュー内容は、コロナ禍前の同年齢（月齢）の乳幼児と比較した成長発達の変化、コロナ禍における乳幼児の成長発達に影響する因子について適宜質問しながら自由に語ってもらった。インタビューは、約30分の半構造化面接とし、対象者に同意を得たうえでICレコーダに録音した。調査は2021年8月1日～30日の期間に実施した。

4. 分析方法

分析方法は、録音したインタビュー内容を逐語録に起こし、データ化を行った。コロナ禍前と比較した成長発達の変化と影響因子についての語りを抽出してコード化した。さらに、類似性と相違点を検討しながら抽象度をあげて、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。データ分析における偏りを防ぐため、3名の看護研究者からのスーパーバイズを受けることで妥当性の確保に努めた。保育士に共通する特徴を見出し、語りから実証的に理論的解釈を行うため、質的研究の中でもグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。今回下記の視点を理由に、木下²⁾の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに従って分析を行った。

保育士が語る内容には、乳幼児とのプロセス的な関わりに基づいた経験の意味が含まれている。M-GTAの分析方法を用いた場合、語りから得られたデータに基づいて、そのデータの持つ本来の意味を物語として結果に反映して取り出すことが可能である。

5. 倫理的配慮

本研究の実施に関しては、明治国際医療大学ヒト研究倫理審査委員会からの承諾を得た上で行った

(番号 2021-012). 研究対象者には, 研究の趣旨の説明と参加の依頼を行い, 研究協力の自由意思と辞退の自由, 途中中断の権利の保障, 不利益からの保護の保障, 個人情報への守秘, データの適切な保管と廃棄について説明し, 同意を得た. 予測される危険と不利益に関しては, 調査内容によるストレスや精神負担を感じた時点で, 研究への参加をいつでも中断・中止できることを説明した. また, 対象者が研究の同意を撤回した場合は, 直ちに対象者から得られた事前記載用紙 (属性) を匿名性を保持した状態で廃棄し, IC レコーダの内容を消去する.

6. 用語の定義

「乳幼児」: 生後から小学校入学前までの乳児と幼児の総称

「成長発達」: 子どもが大人へと成熟する過程であり, 身体的な形態的变化と, 身体・心理的・社会面における機能的・質的な変化をすること

「コロナ禍」: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行による災難や危機的状況

III. 結果

1. 対象者の背景

研究協力が得られたのは, 2 施設の保育士 6 名である. すべて女性であり, 平均保育経験年数は, 18.3±21.7 年であった. 6 名は, A, B, C, D, E, F とする.

表 1 本調査協力者一覧表

名称	性別	保育経験年数	現在の職種
A 氏	女性	40年	主任
B 氏	女性	5年	クラス担任
C 氏	女性	20年	クラス担任
D 氏	女性	16年	クラス担任
E 氏	女性	26年	クラス担任
F 氏	女性	3年	クラス担任

2. 概念とカテゴリー

コロナ禍における乳幼児への影響として, 23 概念, 9 サブカテゴリー, 5 カテゴリーが抽出された. (表 2, 表 3)

以下の本文中ではカテゴリーを【】, サブカテゴリーを《》, 概念を〈〉と記す. 逐語データからの引用部分は「」斜体で示す. 生成したカテゴリーは【保育士のマスク着用による乳幼児への影響】【食環境の変化による乳幼児への影響】【長期化する自粛生活による乳幼児への影響】【感染予防対策による乳幼児への影響】【保育士の乳幼児に対する意識による影響】である.

3. ストーリーライン

以下, 結果に基づくストーリーライン及び概念図を作成した. コロナ禍において, 保育所では感染予防対策の為, 保育士は通常マスクを着用して乳幼児と関わっていた. 保育士は, マスク着用時に示す乳幼児の様子から〈保育士の感情が伝わり難い〉ことによる〈保育士のマスク着用による不快感〉を感じていると推測していた. また, 乳幼児は特に精神的・社会的発達過程にある為, 保育士のマスク着用による〈顔認識が出来にくい〉〈保育士との距離感が解りにくい〉といった反応がみられていた. そのため, 保育士は常に乳幼児の反応をみながら, 〈乳幼児の成長発達に合わせたコミュニケーションの工夫〉を行っていた.

《人との距離感を保った食事環境による影響》について, 保育士は〈食を通じたコミュニケーションが減少〉することによる影響や〈食の楽しみの減少〉による乳幼児への影響を危惧していた. また乳幼児は〈黙食に対する乳幼児の順応〉が出来ていたが, 保育士は食の関心の低下といった, 将来への影響を考えながら関わっていた.

【長期化する自粛生活による乳幼児への影響】としては, 〈人との交流減少による経験知の減少〉により, 〈子ども同士のかかわり方が不器用〉といった, 子ども同士の関わりや, 〈乳児の精神的発達の遅れ〉などの成長発達への影響もみられていた. 〈自粛によ

る外遊びが減少することによる乳幼児への影響」として、自粛生活による公園などの遊びが減少や家の中での遊びが増加したことで、〈乳幼児の動画視聴時間の増加〉や〈自粛生活の長期化による外遊びへの抵抗〉や〈自粛生活による乳幼児の運動機能低下〉に繋がっている児も見られた。また、《外出自粛による母親の心理面への影響》としては、〈保護者間の交流の減少による育児不安の増加〉や〈外出自粛による母親の心理的負担の増加〉がみられる一方、子どもと家庭内で過ごす時間が増えたことで、〈自粛生活により子どもの成長を実感〉している母親もみられ、家庭による格差が大きかった。【感染防止対策による乳幼児への影響】としては、保育園や各家庭における指導による〈乳幼児の手洗行動の習慣化〉がみられた。

コロナ禍の中、保育士は〈保育士の健やかな成長発達を願う思い〉を大切に、常に乳幼児の成長発達に合わせた関わりをしていた。

4. インタビュー結果・分析

1) 【保育士のマスク着用による乳幼児への影響】

【保育士のマスク着用による乳幼児への影響】は、

《マスク着用による保育士の表情が読み取り難いことによる乳幼児への影響》《保育士のマスク着用による乳幼児のコミュニケーションへの影響》2つのサブカテゴリーにより構成される。

(1) 《マスク着用による保育士の表情が読み取り難いことによる乳幼児への影響》

今回の調査において最も多く得られたコードは、《マスク着用による保育士の表情が読み取り難いことによる乳幼児への影響》であった。保育士のマスク着用による影響として、「視覚が今半分無い状態なんで、よけいに読み取りにくい部分はあるのかなって思います」や「この1年って表情を読み取って動くってことが出来る子が少ない」などの表情の読み取り難さにより、「怒っていても、こどもには伝わらなくてへらへらしていたりとか、逆にこっちが普通に喋っているときも、えって目で見てきてはったりとか、表情が読みにくくなってはる」といった〈保育士の感情が伝わりにくい〉ことに繋がっていた。

また、「遊んでいたのに、3日後には忘れていてっていう子も確かにいて、覚えにくいって感じます。」

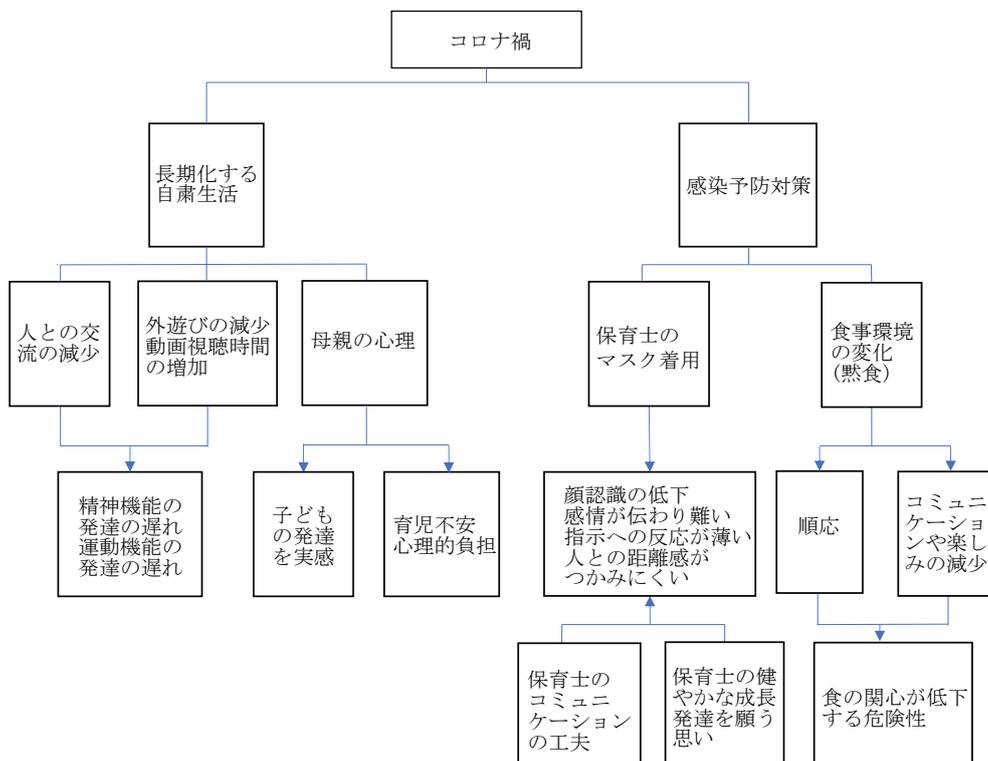


図1 コロナ禍における乳幼児を取り巻く成長発達に影響する環境の趨勢

や「初めてマスクを外して一緒にご飯を食べようってなって、マスクを外したら誰？みたいになって、やっぱりこの辺（目とおでこを指す）を意識してはるんやなって思いました。」とく保育士の顔が認識出来にくいことへ影響していた。

さらに、顔の認識が難しいことや感情の伝わり難さは、「全体的に指示が通り難くなった」や「しゃべっている人の目を見るとかに対してちょっと薄い」といったく乳幼児の反応の薄さへ繋がっていた。

乳幼児にとっては、「表情をうまく読み取れない子もいて、苦手な子はマスクをシャってとったり、とれて怒ったりしはる子はいました。」や「しゃべっているとマスクをとってほしいみたいで、ひっぱろうとしたり、外してみたいなしぐさをしてみたり」といった、相手の表情が見えない事で、不自由さやくマ

スク着用による不快感に繋がっていた。

(2) 《マスク着用による乳幼児のコミュニケーションへの影響》

《マスク着用により子どもへのコミュニケーションへの影響》は、く保育士との距離感が解りにくい」とく乳幼児の言語発達の遅れ」の2つの概念から構成される。

乳幼児にとっては、相手がマスクを着用していることで、「すごい距離感で喋ってくる子がいるんです」と「保育士との距離感が解りにくい」といった影響が考えられる。子ども同士マスクを外して会話する場合は、距離感に問題はみられないことより、マスクを着用している事で、聞き取りにくさや会話時の物理的距離感がつかみにくくなるといえる。

表2 概念とカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	概念
1. 保育士のマスク着用による乳幼児への影響	1. マスク着用による保育士の表情が読み取り難いことによる乳幼児への影響	概念1：保育士の感情が伝わりにくい
		概念2：保育士の顔が認識出来にくい
		概念3：保育士の指示に対する、乳幼児の反応が薄い
		概念4：保育士のマスク着用に対する乳幼児の不快感
	2. 保育士のマスク着用による乳幼児のコミュニケーションへの影響	概念5：保育士との距離感が解りにくい
		概念6：乳児の言語発達の遅れ
2. 食事環境の変化による乳幼児への影響	3. 人との距離感を保った食事環境による乳幼児への影響	概念7：食を通じたコミュニケーションが減少
		概念8：食事の楽しみの減少
	4. 黙食の習慣化による乳幼児への影響	概念9：黙食に対する乳幼児の順応
		概念10：黙食の習慣化による食への関心低下のおそれ
3. 長期化する自粛生活による乳幼児への影響	5. 自粛により、他者との交流機会が減少することによる乳幼児への影響	概念11：人との交流減少による経験知の減少
		概念12：子ども同士の関わり方が不器用
		概念13：乳児の精神的発達の遅れ
	6. 自粛による外遊びが減少することによる乳幼児への影響	概念14：自粛生活による乳幼児の運動機能低下
		概念15：自粛生活の長期化による外遊びへの抵抗
		概念16：乳幼児の動画視聴時間の増加
	7. 外出自粛による母親の心理面への影響	概念17：外出自粛による母親の心理的負担の増加
		概念18：自粛生活により子どもの成長を実感
		概念19：保護者間の交流の減少による育児不安の増加
4. 感染防止対策による乳幼児への影響	8. 家庭の感染防止対策による乳幼児への影響	概念20：乳幼児の手洗行動の習慣化
		概念21：家庭による感染防止対策への認識の違い
5. 保育士の乳幼児に対する意識による影響	9. 保育士の乳幼児の成長発達を意識した関わりによる影響	概念22：乳幼児の成長発達に合わせたコミュニケーションの工夫
		概念23：保育士の健やかな成長発達を願う思い

表3 概念と定義

概念	定義
概念1：保育士の感情が伝わりにくい	保育士が常時マスクを着用して乳幼児へ関わる事で、乳幼児は表情が読み取りにくく保育士の感情が伝わり難い
概念2：保育士の顔が認識出来にくい	保育士が常時マスクを着用していることで、乳幼児は、保育士の顔の認識ができにくい
概念3：保育士の指示に対する、乳幼児の反応が薄い	保育士のマスク着用により、指示が伝わりにくく、乳幼児の反応も薄くなる
概念4：保育士のマスク着用に対する乳幼児の不快感	マスク着用により、保育士の表情が読み取れないことで、乳幼児は不快感や不自由さを感じている
概念5：保育士との距離感が解りにくい	保育士がマスク着用することで、乳幼児は保育士とのコミュニケーションにおける距離感が解り難い
概念6：乳児の言語発達の遅れ	マスク着用による人との関わりが増加することで、乳児の発声や発語など言語発達の遅れがみられる
概念7：食を通じたコミュニケーションが減少	人との距離を保った食事環境や黙食より、食事時のコミュニケーションが減少している
概念8：食事の楽しみの減少	人との距離を保った食事環境や黙食より、乳幼児の食事に対する楽しみが減少している
概念9：黙食に対する乳幼児の順応	乳幼児は、保育園の黙食に対して順応する事ができている
概念10：黙食の習慣化による食への関心低下のおそれ	黙食が習慣化することで、食への楽しみや関心が低下することが危惧される
概念11：人との交流減少による経験知の減少	自粛生活や休園により、友達同士の関わりや、様々な経験が減少している
概念12：子ども同士の関わり方が不器用	自粛生活が長期化することで、子ども同士の関わり方が不器用になっている
概念13：乳児の精神的発達の遅れ	自粛生活の長期化により、乳児の精神的発達の遅れがみられる
概念14：自粛生活による乳幼児の運動機能低下	自粛生活による外遊びの減少などの影響により、乳幼児の運動機能の低下がみられる
概念15：自粛生活の長期化による外遊びへの抵抗	自粛生活による外遊びの減少により、乳幼児の外遊びへの抵抗がみられる
概念16：乳幼児の動画視聴時間の増加	自粛生活による家庭内の遊びの増加に伴い、乳幼児の動画視聴時間が増加している
概念17：外出自粛による母親の心理的負担の増加	自粛生活により子どもと過ごす時間が増加したことで、母親の心理的負担が増加している
概念18：自粛生活により子どもの成長を実感	外出自粛により子どもと過ごす時間が増加したことで、母親は、子どもの成長を実感した
概念19：保護者間の交流の減少による育児不安の増加	コロナ禍により保育園での保護者同士の繋がりや交流が減少し、母親の育児不安が増加した
概念20：乳幼児の手洗行動の習慣化	手洗い指導への順応により、乳幼児の手洗行動が習慣化された
概念21：家庭による感染防止対策への認識の違い	コロナ禍における感染防止対策に対する認識は、家庭ごとに認識の差がある
概念22：乳幼児の成長発達に合わせたコミュニケーションの工夫	保育士は乳幼児の成長発達や反応に合わせて、様々なコミュニケーションの工夫をしている
概念23：保育士の健やかな成長発達を願う思い	保育士は、コロナ禍による乳幼児への影響を危惧し、様々な思いで関わっている

また、「今までより言葉面の発達が遅いんかなと思ってます。」「ことばの発音とか発声の点ですかね。喃語すらもなかなかでなかったりして」との発言にみられるように、〈乳児の言語発達の遅れ〉がみられた。

2) 【食事環境の変化による乳幼児への影響】

【食事環境の変化による乳幼児への影響】は、《人との距離感を保った食事環境による乳幼児への影響》と《黙食の習慣化による乳幼児への影響》の2つのサブカテゴリーから構成される。

(1) 《人との距離感を保った食事環境による乳幼児への影響》

コロナ禍においては、乳幼児の食事環境が大きく変化していた。コロナ禍により「今までは、おいしいねって食べていたのが、そこでコミュニケーションをとったりしていたんですけど、やっぱりそういったことも薄くなってきている」や「今までは、1つのテーブルに向かい合わせになって、楽しく会話しながら食事していたんですが、今は1つの方向を向いて食べているんです。」といったく食を通じたコミュニケーションが減少していた。したがって、感染防止対策としての黙食の徹底は、乳幼児の食事の際のコミュニケーションに影響していることが伺える。さらに、「なんか子どもにとって食事は楽しく食べるもんだって教えていきたいんですが、子どもはどんな思いで食べているのかなっていうのを思います」といった、子どもからの直接の発言ではないが、「食事の楽しみの減少」を感じていることが伺える。このような状況下において保育士は、子どもの食事は、栄養摂取の目的だけでなく、食を通じて楽しさを感じてもらいたいと願っているといえる。

(2) 《黙食の習慣化による乳幼児への影響》

コロナ禍において乳幼児は、黙食に対して、「順応してますね」や「食事は無言で食べるのが当たり前みたいな感じ」といった発言にみられるように、乳幼児は、今までと異なる食事環境に順応していた。一方保育士は、「慣れって怖いじゃないですか。今までやったら、べちゃくちゃ喋ってたんですが、喋ったらあかん、何分までに食べて。それは影響あるかも」や「影響って考えるなら、食事の場面ですね。」といった黙食の習慣化に対する、将来への影響を危惧していた。今後への影響として、「習慣化による食の関心の低下、そっちのほうに気がなりますね。」といった「黙食の習慣化による食への関心低下のおそれ」を危惧し、不安に感じていた。

3) 【長期化する自粛生活による乳幼児への影響】

【長期化する自粛生活による乳幼児への影響】は

《自粛により、他者との交流機会が減少することによる乳幼児への影響》《自粛による外遊びが減少することによる乳幼児への影響》《外出自粛による母親の心理面への影響》の3つのサブカテゴリーより構成される。

(1) 《自粛により、他者との交流機会が減少することによる乳幼児への影響》

長期化する自粛生活による影響として、「園に来たほうが、いろんな経験ができる。先生とか子どもと交流できるって思って預けられているんだろなって思います。」といったく人との交流減少による経験知の減少がみられた。さらに、「園になじめないのと、信頼関係を築くのが難しくて時間がかかりました。」や「慣れるのに時間はかかって、やっと他の子どもを認識しだしても、関わり方を知らないの、関わり方も不器用な子が多かったです」といった、く子ども同士のかかわり方が不器用」といった、子ども同士の関わりや、人との関係性の構築にも影響がみられた。

また、「やっぱり指さしとかは遅いんかなって。いつもより遅いかなって。」との発言にみられるようにく乳児の精神的発達の遅れなどの成長発達への影響がみられていた。

(2) 《自粛による外遊びが減少することによる乳幼児への影響》

自粛生活による公園などの遊びが減少したことにより、家内での生活時間が長くなった。その影響として「動けてない分、こげやすかったり」や「家にかえってお菓子食べてテレビ観てるって。で、保育園にきて、マラソンとか、かけっこしてとかになったら、よくこげるなって思うことが多いかな」「ようこけてるなって思う事があります。」といったく自粛生活による乳幼児の運動機能低下がみられていた。外出の自粛から、外遊びが減少し、家の中での限られた活動となることで、粗大運動への影響がみられた。

外で遊び機会が少なくなることで、「外にでたこと

が無かった子が多かったです。お外遊びも経験がなく初めての経験だったので、拒否する子が多かったです。慣れるまでは拒否しはる感じで、慣れていない子が多かったりとか。」といった<自粛生活の長期化による外遊びへの抵抗>へつながっている乳幼児もみられていた。

さらに、家で過ごすことが多くなったことにより、「3歳児検診とかで、ユーチューブ観すぎっていわれましたって、言ってこられることも何軒かあった」といった<乳幼児の動画視聴時間の増加>につながっていた。

(3) 《外出自粛による母親の心理面への影響》

感染拡大状況による、休園・親のリモート勤務などの働き方の変化により、乳幼児の家族と過ごす時間が増えた。母親の心理面への影響として「お母さんも子どもとずっと一緒に、気分転換も出来ないだろうし、しんどいって言うてはることもあった」や「イライラするって言うてくれるおかあさんもいる」「この子、ほんまにじっとしてへんから、いらいらしてこの前叩いたって言うてくるお母さんもいて」といった気分転換が少なくなったことなどによる、<外出自粛による母親の心理的負担の増加>がみられた。一方「仕事休みの時が多くなったので、一緒にごはんをつくらかってなって、ちょっと手伝わせるつもりが、こどもがすごく喜んで、これもするあれもするって言うて、大丈夫かなって思ったんですけど、案外やらせたら出来たって。いままでやったら、危ないやめときなさいって言うていたのがゆっくり接していけて、思った以上に成長していることを感じたって言うておられました。」や「こんな大事な時期と一緒に過ごせて良かったって」といったように<自粛生活により子どもの成長を実感>している母親もみられ、家庭による格差が大きかった。

また、「同世代のお母さんとしゃべって、たわいもない話でこんなすんねんとかという機会が減少した」ことにより「細かなことでも深く悩はることが多くなったって思うんですけど」といった<保護者間の交流の減少による育児不安の増加>がみられた。

4) 【感染防止対策による乳幼児への影響】

【感染防止対策による乳幼児への影響】は、《家庭の感染防止対策による乳幼児への影響》のサブカテゴリーにより構成される。

(1) 《家庭の感染防止対策による乳幼児への影響》

コロナ禍における感染予防対策としては、保育園での対策や指導だけでなく、各家庭においての指導がされていた。「家でも手洗いうがいをしっかりするように言われている」や「手洗いでも今までは、ばばってして帰ってくるのが、親から言われている子は、結構めちやくちや石鹸をつけて洗っているんです。」といった、家庭による差はあるが、<乳幼児の手洗行動の習慣化>がみられた。

マスク着用については<家庭による感染防止対策への認識の違い>が見られ、「家庭によって、つけさせて欲しいって言わはるお家と、あまり気にされないうお家もあって。」といった発言にみられるように、暑い日の外遊び時に、促してもマスクを外さないなどの幼児もみられた。

5) 【保育士の乳幼児に対する意識による影響】

【保育士の乳幼児に対する意識による影響】は、《保育士の乳幼児の成長発達への意識による影響》のサブカテゴリーにより構成される。

(1) 《保育士の乳幼児の成長発達への意識による影響》

保育士は、マスク着用した際、「リアクションを大きくするときがあつて、声をはったりします」や「絵本の読み聞かせの時も表情とか声を変えて読んでい」といった<乳幼児の成長発達に合わせたコミュニケーションの工夫>を意識的に行っていた。また、「大きいこえで、大事なことを言う時には、マスクを外したいなって思う時があります。」や「やっぱりマスクは外したほうがやっぱりいいとか。言葉では、口の動きをしっかり教えてあげたいなって思つて」といった<保育士の乳幼児に対する思い>を持ち、将来を見据えた関わりを行っていた。

IV. 考察

1. 保育士のマスク着用による乳幼児への影響

今回の調査結果より、最も多くみられたのは、【保育士のマスク着用による乳幼児への影響】であった。西館の調査によると、6割の保育士がマスク着用によって困った経験があり、理由として声が通りにくいことや、保育者の表情が子どもへ伝わり難いことが多くあがっている³⁾。マスク着用により、顔の大半が見えにくく、特に視覚などの感覚機能の発達が未熟な乳幼児にとっては、保育士の目元しか見えないことで、表情や感情の伝わり難さに繋がっていたといえる。また、マスク着用により声がこもりやすく、声が聞き取り難いことも、乳幼児に対して指示の伝わり難さに繋がっていることが考えられる。

また北島らは、マスクを着用による高音領域の音圧低下により、高い声が聞き取りにくくなることを明らかにしている⁴⁾。保育者は、比較的に高い声で乳幼児に声をかけることが多いため、マスク着用しての声かけは、乳幼児にとっての聞き取り難さに繋がっているとも考えられる。特に、乳幼児は認知機能が未熟であり、年少ほど相手の言葉を理解することに限界がある。そのため、相手の表情を観察し、声のトーンなどより、相手理解しようとする。そのため、乳幼児が保育士のマスクの着用を嫌がるのは、表情が解り難いことや聞き取り難さより不自由さや不安を抱いて感じていたのではないかといえる。さらに、言葉の聞き取り難さは、言語の獲得過程にある乳幼児にとって、コミュニケーション機能への影響が危惧される。現在大きな言語発達への影響が明らかになっていないのは、乳幼児の発達への影響を危惧して、保育士が日々表情を豊かにし、目元を意識的に笑みにすること、声のトーンやスピードを工夫し、活舌よく伝わりやすいように声かけするなど、意識的に関わっていることによると考える。乳幼児は、自分の思いを言語で十分に伝えることが難しいが、思いをくみ取ろうとする保育士の暖かな関わりや癒しも成長発達に大きく影響すると考える。

現在マスクを外して、相互にコミュニケーション

が取れるのは家庭の中だけである。その為、口の動きをみながら声を聞き、乳幼児の言葉発達を促せられるような意識的な関わりを家庭内で行ってもらえるように、保護者へ促すことも必要であると考えられる。通常家庭においては、マスクを着用していないため、意識しにくいですが、マスクを外した状況において、しっかりと口を開けゆっくり話す、活舌よく話すなどの意識的な関わりが必要である。

2. 食事環境の変化による乳幼児への影響

今回の調査により、【食事環境の変化による乳幼児への影響】として、《人との距離感保った食事環境による乳幼児への影響》と《黙食の習慣化による乳幼児への影響》が抽出された。鈴木らの調査によると、幼児のコロナ禍による間食量の増加やだらだら食べといった食生活の乱れが明らかになっている⁵⁾。しかし今回の調査からは、保育園における食生活の乱れは見られなかった。実際、保育園において乳幼児は前を向き、決まった時間で会話せず食事する事に対し、拒否的な反応もあまりみられず順応していた。そのため、周りの環境に合わせて乳幼児なりに順応できる力をもっているともいえる。しかし《人との距離を保った食事環境》や《黙食の習慣化》は、子どもにとっての食の意義に大きな影響を及ぼすと考える。乳幼児としての食育が推奨されている中、このような食環境により、現在だけではなく将来に向けての「食への関心や意欲低下」が危惧される。また、現在の食環境しか解らない乳幼児にとっては、食事は黙食と人との距離感が大切で、食事中的コミュニケーションはとってはいけないと認識しやすい。その為、食の楽しさや食を通じた満足感、食を通じて社会性を身につけていくことが重要な乳幼児にとって、食事の大切さを感じにくい環境である。さらに、今回の調査では明確になっていないが、咀嚼・嚥下や味覚の発達への影響も危惧される。乳児に対する食事介助について、中山は「しっかりと口をあげて食べる、もぐもぐと噛むことは、子どもたちが家で、マスクなしで食事介助されることにより、あーんもぐもぐが見られる」と述べている⁶⁾。その為、コ

コロナ禍における保育園の食環境では困難となる咀嚼・嚥下の促しについては、保護者との連携を検討していく必要がある。

3. 長期化する自粛生活による乳幼児への影響

【長期化する自粛生活による乳幼児への影響】は、《自粛により、他者との交流機会が減少することによる乳幼児への影響》《自粛による外遊びが減少することによる乳幼児への影響》《外出自粛による母親の心理面への影響》のサブカテゴリから構成される。長期化する自粛生活による影響は大きく、外出自粛だけでなく、特に休園の影響が大きかったといえる。通常保育園においては、子どもの発達を促す為に、様々な工夫や体験を行っている。また乳幼児は、友達との関わりを通じて社会性を身につけ、日常生活習慣を通じて自立や自律・自発性を獲得していく。その為、外出自粛や感染拡大による休園の影響が大きかったと考える。

「こけやすくなった」などの意見がえられた点については、長期化する自粛生活による、乳幼児の運動機能低下がみられていたといえる。七木田らの研究において、コロナ禍において「寝転がったり、座っているときに身体を支えることが苦手」と感じている保育者が5割を超えており、「小さなケガが増えた」と実感している保育者が25%いた⁷⁾。したがって軽微な負傷やヒヤリ・ハットの増加は運動遊びの経験と時間の不足が一つの要因であるといえる。特に乳幼児は、視覚や粗大運動・微細運動の発達過程にあるため、このような影響をうけやすいといえる。

また、自粛生活の長期化により「子ども同士の関わり方が不器用」といった社会性の発達へも影響していた。乳幼児は、様々な人との関わりを通じて、他者を認識し、人との関わり方を学び、関係性を構築していく発達段階にある。そのため、マスク着用によるコミュニケーションや家族以外の大人や子ども同士の関わりが少なくなったことにより、保育士や子ども同士の信頼関係の構築にも時間を要するなどの影響がでていた。

さらに自粛生活により、乳幼児の動画視聴時間の

増加もおこっていた。鈴木らの調査によると遊びにおけるスクリーンタイムの増加や外遊びの減少がみられ、緊急事態宣言解除後も継続される傾向が認められた⁴⁾。自粛期間が長期化したことで、スクリーンタイムが習慣化した影響もあると考えられる。現在は、外出自粛は緩和されつつあり、保育園においても外で活発に遊んでいるが、スクリーンタイムの習慣化は、成長発達段階にある乳幼児へ、様々な影響を及ぼすのではないかと考える。

自粛生活の長期化による母親への影響としては、様々な調査が行なわれており、母親の心理的負担が増加していることが明らかになっている。一方で、「自粛生活により子どもの成長を実感」している親もみられていた。外出自粛やリモート勤務より、子どもと一緒に過ごす時間が増加したことで、子どもの成長発達を実感するなどのメリットもみられ、家庭の状況により格差が大きいといえる。その為、子育て状況やサポート体制状況を把握し、必要に応じて母親の心理支援が必要であるといえる。

4. 感染防止対策による乳幼児への影響

コロナ禍において、保育園においても感染防止対策が行われているが、各家庭においても子どもへの指導が強化されていることで、乳幼児の感染予防対策を習慣化することが出来ていた。しかし、マスク着用に関しては、各家庭における認識の差が大きく、外遊び時にもマスクを外すことに抵抗感のある子どももみられた為、感染予防策は大切であるが、過度な感染防止による乳幼児の身体への影響を考えた支援が必要であるといえる。

5. 保育士の乳幼児に対する意識による影響

保育士は、現在のみならず乳幼児の将来を見据えた関わりをしていた。そのため、子どもの反応に合わせたコミュニケーションや関わりの工夫を行っていた。現在、乳幼児の発達上に大きな問題がみられないのは、保育士の日々の関わりによる影響もあると考える。

V. 研究の限界と今後の課題

今回は、対象者が2施設6名と少なく、収集データに偏りがあることは歪めない。今後は、幅広い保育士を対象に研究を積み重ねていく必要があると考える。

VI. 結語

1. コロナ禍における乳幼児の成長発達への影響因子として、【保育士のマスク着用】【食環境の変化による影響】【長期化する自粛生活】【感染予防対策】【保育士の乳幼児に対する意識による影響】の5カテゴリー、9サブカテゴリーが抽出された。
2. 乳幼児は、保育士のマスク着用により顔認識が出来難く、指示や感情が伝わり難い為、表情や目元・声などを意識した、コミュニケーションの工夫が必要である。
3. 乳幼児は保育所の黙食に対して順応しており、食育への大きな問題はみられなかったが、今後も成長発達への影響を継続的にみていく必要がある。
4. コロナ禍における乳幼児の成長発達への影響は、家庭の影響を受けやすいため、個々の状況に応じた家族への支援が必要になる。

謝辞：本研究を実施するにあたり多大なご協力を頂きました研究協力者の方々、ご指導くださった本研究に携わってくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反：本研究において開示すべき利益相反はない。

文献

1. 国立成育医療研究センター：コロナ×こどもアンケート 第1回調査 報告書 https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/report_01.html
2. 木下康仁：ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて、弘文堂、東京、pp1-308, 2007.
3. 西館有沙：マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育士の意識. 人間科学部紀要, 第10(2): 125-130, 2016.
4. 北島万裕子, 加税美恵, 飯野矢住代：マスクを着用した看護師の声は患者にどのような音として聞こえているのか. 日本看護技術学会誌, 11(2): 48-54, 2012.
5. 鈴木瑛貴, 遠藤隆志, 窪谷珠江馬場ら：コロナ禍が幼児の日常生活ならびに健康に与える影響-2021年2-3月の保護者へのアンケート調査より-. 植草学園短期大学紀要, 第23号: 87-95, 2021.
6. 中山美佐：コロナ禍の保育-保育者の食事介助・乳幼児の発語に着目して-, 大阪樟蔭女子大学子ども研究所紀要, 巻12号: 73-77, 2022.
7. 七木田方美：「新しい生活様式」における保育施設での乳幼児の変化, COVID-19感染拡大第5波直前の現役保育士への調査考察, 比治山大学短期大学紀要: 第57号, 17-26, 2022.
8. 国立成育医療研究センター：新型コロナウイルス感染症流行による親子の生活と健康への影響に関する実態調査 https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/finreport_07_oth.html

Impact of the Corona Crisis on Infant Growth and Development

Miyuki Iwamoto¹⁾

¹⁾Faculty of Nursing, Meiji International Medical University

Summary

This study clarifies the actual state of daily life of infants and toddlers in the corona disaster and its influence on growth and development.

The aim is to find support that enables infants and toddlers to grow and develop healthily while continuing infection control measures. The study subjects conducted semi-structured interviews with childcare workers who spent a lot of time with infants and toddlers in their daily lives. The results obtained from interviews with childcare workers were analyzed using a revised version of the Grounded Theory Approach (M-GTA).

As a result, 23 concepts were extracted in 5 categories, 9 subcategories, and 23 concepts of the impact on infants and toddlers in the corona disaster: "wearing masks by childcare workers", "impact due to changes in the eating environment", "prolonged self-restraint lifestyle", and "infection prevention measures", "impact due to childcare workers". Infants and toddlers are susceptible to the influence of the surrounding environment, and it was suggested that the influence on growth and development by the wearing of masks by childcare workers, changes in the eating environment, self-restraint lifestyles, infection prevention measures, etc. during the corona disaster was suggested. Furthermore, considering the impact not only on the present but also on the future, it became clear that childcare workers are devising relationships such as communication and consciously engaging on a daily basis. In the future, it will be necessary to find conscious support that promotes the healthy growth and development of infants and toddlers while implementing infection prevention measures.